

## ユーモア・スピーチの会

中村 龍介

十年ほど前、知人でオルガン奏者の児玉麻里さんに中野の御自宅で初老の男性を紹介された。名刺をみると、「ユーモア共和国大統領」とある。共和国では、月に一度、同好の士が集まって、皆の前で一人ずつ三分間スピーチをやるのだという。興味を覚えて児玉さんと二人で参加してみた。

秋葉原駅の近く、万世橋区民会館の集会室に三十人前後のメンバーが集まっていた。最初に大統領から簡単なルールの説明があった。スピーチは三分以内とする。内容は、政治、宗教、商売に関するものは禁止。メモを見ることが原則禁止。

スタートの合図で座席の順に前に立ってスピーチが始まる。小話、歌謡（替え歌）、大道芸など、様々な出し物が披露された。皆さん、よく練習してきたのだろう、とても上手だ。

飛び入りで参加した私も指名されて、用意した小話を一席。これが意外に受けて、次回から定例メンバーになるよう要請された。

会は毎月第一月曜日、六時から八時まで。その後、近くの居酒屋に集まって反省会がある。こちらは自由参加だが、日ごろ接している分野とは全く違った職業や経歴をもつ人たちの会話は結構楽しい。典型的な異業種交流会である。

一年近くは続いただろうか。ある日、児玉さんから提案があった。

「ねえ、秋葉原は遠いでしょ。私たちもここで始めてみない？ あなた、幹事になってメンバーを集めてくださらない。私も十人くらいなら大丈夫よ。それに、ホームページを作って、不特定の人に呼びかけるっていうのもいいわね」

児玉さんは言葉遣いこそ丁寧だが、話の内容はかなり強引で、強圧的だ。本来なら即座にお断りするところだが、当時、会社の方は現役を引退したばかりで、生活に大きなブランクが出来ていた。喜んでお受けすることにした。

大統領にも協力をお願いして、「ユーモア共和国中野支部」が発足した。

二〇〇四年十月二十八日、児玉邸に十四人が集って、中野支部の第一回会合が行われた。大統領も出席して、ユーモア共和国設立の趣旨や共和国憲法と称する、会のルール説明があった。

スピーチが自己表現のトレーニングとして有効なのは勿論だが、会の主旨は異業種の人たち相互の交流と親睦にある。スピーチの後の懇親夕食会に力点が置かれた。当初は近くのレストランでの外食だったが、三回目辺りから会費を徴収し、児玉邸での手料理となった。児玉さんが顔の広いところを發揮、フレンチやイタリアン等のシェフを呼び寄せ、本格的な手料理を準備する。時には、私が十五人分のカレーやボルシチを大鍋に作って、車で出かけることもある。

毎年十二月には、都内のレストランを借り切って、クリスマス会を開く。この時は三十人近くが集って、隠し芸大会やキャンドルサービスなどで盛り上がる。メンバーは、何故か男女がほぼ同数、平均年齢は約七十歳。皆さん童心に帰って無邪気にはしゃぐ。

その会も今年で十年目、次の例会で百回を数える。幹事の仕事もかなり面倒だ。何よりも、毎月の例会の案内や報告をホームページにまとめて掲載する仕事に負荷がかかる。

先般、百回の節目を機に、会を発展的に解消してはどうか、と提案してみた。メンバーの年齢を考えると、この先、何時までも続くはずはない。現に、当初のメンバーで鬼籍に入られた方、病に倒れた方なども少なくない。当の児玉さんだって何時まで持ち前の元気が続くのか。尻切れトンボで終わるよりはキリのいいところで解散する方が気持ちよく収束できるのではないか。

ところが、女性軍から一斉にブーイングが来た。

「そんなこと言わないで！」

「月に一度の楽しみを奪わないで！」

「行ける所まで行きましょう！」

熟女たちに泣きつかれると、幹事も弱い。頼られるうちが花かもしれない。仕方がない、もう少し頑張ってみるか！

「ユーモア・スピーチの会」幹事の仕事は私のライフワークになりそうな気がする。

(了)



クリスマス会のスナップ  
隠し芸の衣装や演目がとても  
楽しい。

